

昨年の11月24日、『第3回北斗市子ども議会』が開催されました。昨年度は新型コロナウイルスの影響で様々な行事が中止になる中、子ども議会は感染防止対策を定めた道のガイドライン「新北海道スタイル」を実践し、例年と同じ市議会議場で行うことができました。今年も傍聴席からの様子を皆さんにお伝えしたいと思います。

議場執行部席には市長、副市長、教育長のほか、市議会議員や関係部課長が列席し、各校代表1名の子どもの議員は議員席に座りました。小学生11名、中学生4名、高校生4名の計19名(中学生1名欠席)の中から議長を務めたのは、「皆さんの協力をいただき、会議をスムーズに進めたい」とあいさつをした上磯中の西里遥伽議員。議長の落ち着いた雰囲気、一般質問に登壇する9名の緊張もほぐれたのではないのでしょうか。

トップバッターは函水高の木村美羽議員。市の魅力度アップに水族館を建設し、函水生と協力したまちづくりを提案しました。市長は「函水高とのコラボレーション企画は本市が目指す市民協働の実践である」とした上で、大型施設建設には維持管理も含めた大きな財政負担が伴うことと、上磯町と大野町の住民が様々な協議を経て策定した北斗市まちづくり計画に「水族館建設は位置付けら

れていないことも考慮しなければならぬ」と答弁しました。水族館建設は浜分小の松橋健議員も提案しており、子どもたちの海を活かしたいという気持ちを感じることができました。

浜分中の土田りさ議員は、社会がグローバルな人材を求めている背景を踏まえて、市に留学費用を負担する制度と、現在の英語検定料補助金交付制度の対象級拡大を提案しました。永田教育長は「中学生の海外派遣は旧上磯町も旧大野町でも行っていたが、様々な課題があり終了した。英検3級を受験した中学生は現在、市内全中学3年生の13%にとどまっている。中学生の意欲が高まるようであれば、補助対象を2級まで拡大することを検討したい」と答弁しました。



た。土田議員は再質問で海外派遣の課題の説明を求め、「少人数しか体験できないという点と、高い語学力を要する点があった。市では幅広く英会話に親しめるようにA・L・I(外国語指導助手)などに移行した」との回答を得ました。議論が深まるにつれて、双方の観点が分かりやすく私に伝わり、議場は市政理解の根幹であることを改めて感じました。

沖川小の竹内大騎議員は、テレビ番組の出演者が新駅の所在地が北斗市であることを知らなかったことを聞き、新駅でのご当地メニューの提供や野菜直売所を設置するなど、認知度を高める具体案を提示しました。市長はこれまでの賑わい創出や特産品PRのイベントが、「駅前の活性化ということでは、その達成に至らなかった」と説明。そのうえで新たに取組んでいる施策に注目してほしいと答弁しました。直売所については「大変興味深い」と検討を進める意向を示しました。竹内議員の質問によつて、令和元年度の北海道新幹線利用者数は1か月平均で約13万6千人であることが分かりました。まだまだ地域活性化のチャンスが続いていると感じた議員も多かったのではないのでしょうか。

議事終了後、市長は「青少年育成大会で感じる北斗市が大好きだという気持ち、それを活かしたいと思った」



と、子ども議会の開催を続ける理由を話しました。私が取材を行っている『人と未来』でも、「地元が好きですよ」と答えてくれる方がまちづくりを続けています。ただ、ここ数年はそういう方々から担い手不足を抱えている現状も多く聞きます。「皆さんの意見は北斗市発展のために役立させていただく」という市長の言葉が、子ども議員だけでなくあらゆる市民に届くようにここに書き記して終わります。